

藤垣内翁畧年譜

附門人

0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

タイトル番号 : 0078

書名 : 藤垣内翁畧年譜

1冊

289.1

藤垣内翁略年譜

寶曆
六子丙

二月十七日夜子刻伊勢國飯高郡松坂の里にて生きたる幼名稱懸常松とす

七

二歳

八

三歳

九

四歳

十

五歳

十一

六歳

十二

七歳

十三

八歳

明和
元申甲

徳力明通ふよりて手習ひ始めたり
同人の謡曲を習ふたり

九歳

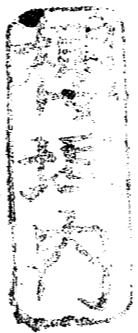
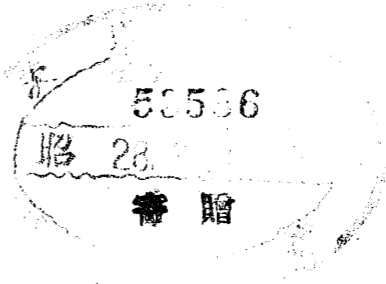
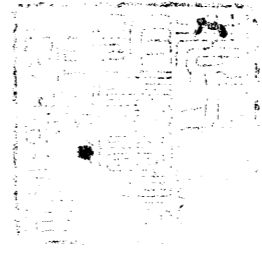
二

父棟隆の意を承りて古今集を素讀し免たり

十歳

○藤垣内翁略年譜

○一



三	四	五	六	七	八	安永 元 辰壬	二
歌々み始め終り	竹内好正のけきして孝経四書五經など去年の冬よりつきく くく始め終り好正も直道の父なり	鈴屋翁の教子の終り終りて茂徳と稱し十二月三日須賀直見 家終會の歌箱彙集別巻の初出あり			四月比より大御神に御蔭泰といふ事ありを俗言交り 記し終り是著述の始なり	三月五日旅よりして鈴屋翁ととも芳野の 物終りて十四日家より歸り終り 十一月二日 元服し終り十歳と終り後十太と改元も終り	三月十日叔父山口暎方と伴ひて木曾路を へく廿五日江戸に着終り四月廿二日江戸を たちて鶴岡八幡宮秋葉山をくく終りて 五月四日歸り終り着き終り
十一	十二	十三	十四	十五	十六	著述 餌袋の日記 吉野の 記行なり	草枕の日記 東路記 行なり
十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八

三	四	五	六	七	八	九	天明 元 辛丑	二	三
		御蔭まゝての記書改め終り	十月十日西村信廣ととも小旅よりて京の をくく終り近江の湖のやまを見巡りて 廿六日終り		正月鈴屋翁の五十賀會終り終り		八月十七日旅よりして津の國有馬の湯の をくく終り九月廿五日終り終り		
			關のくまや 上京記 行なり				有馬の日記		
十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八

○藤垣内翁畧年譜

〇二

六	二月廿三日若山をよらて初瀬路をへて松坂より五月二日 大御神宮に参りて六月八日松坂をよらて妻子たちををて十二日若山をよらて本町四丁目小寓居に居る	每朝并神式	五十四
七	二月十九日三男安松主出生 宅地をよらて二月廿日廣瀬辨財天山に移り居る	百人一首梓弓	五十五
八	十月風土記の撰よりて巡邨の事あり十一月廿四日四女小百合病死	荅富田美安書 三大考辨 假作設象	五十六
九	三月古事記傳五世玉勝間やとを御前よりけりて五月廿八日馬毛名合の歌を註解して進らるへき仰言あり七月は事ありて獻し居る	源氏物語樂事抄	五十七
十	十一月召りて家格をよらる	馬毛名合解 後年刻	五十八
十一		五七材 五十七文字より	五十九

十二	二月 お不殿の御前の七十は御賀は翁建正清島主をて歌奉り居るよりて賜物あり三月十六日翁の六十賀會沼野記より別業より題ハ寄本祝ありかといは遠方よりて法哥をよらるへてこの集りて詞の繁山といふ廿二日建正清島主京よりて松坂かかち居る大奥の御方より法哥の事ともありあり正月廿三日京小ものより錦小路より釋舎よりて日本紀後撰集万葉集を講説あり二月九日より一條殿下の大政所君の御前より源氏物語萬葉集百人一首をよらてき居るの賜物あり十八日伊勢中よりて所々講談あり五月十日は序を著き居る	萬葉山常百首 假字比さるゑん	六十
十三	五月 外宮御装束の梨子十三種 古事記傳六 映石上私淑言ややを 殿の御前より奉り居る	春錦 上京記行あり 夏衣 伊勢記行あり	六十一
十四	正月十九日をよらて二月の末まで 殿の御前より神樂歌百人一首の進講をよらる	藤垣内歌集成 古風哥の家集 稲葉集成 後年刻 後世風の哥の家集	六十二
文政 元 戊寅	二月朔日 祿を埒り居る	神樂歌新釋成	六十三

○藤垣内(羽畠)年譜

○六

七	六
<p>九月十六日京へ出ゑあちて廿一日北山修學寺小院の帝に御幸し御歌を授け給ふ此不との事ハ秋錦のり十月十日家へ歸り給ふ</p>	<p>二月十五日 殿の御前小古事記の神代を進講し給ふ此時布衣着用をへき仰言り後神樂哥庭燎韓神其駒をを拜聴り君の御所作を和琴なり事々々賜物なり三月廿二日又御樂拜聴し給ふ 君の御を和琴にて管絃羯鼓太鼓二十餘人合奏なり四月 姪健藏有郷主小月俵を給ふ五月二十九日内遠主來訪りてち先て翁を逢給ふ 十月十九日二十五日 西濱の御殿あて御舞樂を拜見し給ふ十一月藤垣内にて歌會の教子の歌とを此のちを月毎小さくけまをへしとの命ありて御題をも給へり</p>
<p>秋錦 一名紅葉の御幸 冬衣 未脱稿</p>	<p>御舞樂之記</p>
六十九	六十八

十二	十一	十	九	八
<p>十二月廿二日伊勢山田の安田廣治より格衣を得て西濱の 前大納言の君に御前小奉り給ふ</p>	<p>十一月七日健亭春庭翁六十六歳七身まつと給ふ</p>	<p>正月廿九日格祿共々み給ふ書籍歌文おとの事志々々作言り</p>	<p>正月廿四日 大殿の御前の御八十お賀は歌奉り給ふ三月二日多羅尾の氏純主の招讀ありて芬野の花見より立出まひ七日小ゆりし三月三日陸森岡宮より公前の七十お賀會りて賀茂奈鷹主静子より出席りて此舞ともあつた記して藤垣家と云八月十七日又和歌浦歌齋揚りてとまのり十月十六日奥詰といふふりて給ふ</p>	
<p>八十浦玉中巻刺成</p>	<p>紀國百首撰成</p>	<p>自撰歌</p>	<p>藤垣内文集撰成 花盛の日記 芬野記行</p>	
七十四	七十三	七十二	七十一	七十

○藤垣内羽畧年譜

○八

天保 元庚寅		
三	二	
<p>正月十九日御能を見給ふ云々 前大納言の君の正三位 かきこ給へ御よるにひたり或人の此のころ死する 翁文を記して奉り給ふ云々 賜物あり六月朔日 紀國忠孝傳の序文を記給ふ此のころ死する てうちや一給へと猶快きをもちハ御殿も出給ひ 何れの事ともある給へり年ご日記と云物と云 給へり八月二日まへに給へりもの一給へり作文ハ阿波 藩士賀島長総の直靈考の序稿を記す 給へりともあがりり此後まへに給へり 出給へり毎日重なり行給へり中々學道の事歌の 事と云いおき給ひ云々此は給へり事と云ふ まへ九月十一日の曉かきつひまうせ給へり後の名を國 足八十言靈大人と稱し普通の汰蹄と和心院意 富必樂居士とまをを奥墓ハ若山湊吹上寺あり鈴屋翁とむとく笏の を靈牌として影像とをて大人の家のハ祭り給へり此肖像ハ今年の三月丹 波人長谷川素庵と云る画工來居てうたてとてよく似たり上り 給へり母ハ 真直やちやと心ふまひてその神のまことの道と給へり 首のまへに給へり云々引直一給へり此の事ハ内遠大人の記給へり終焉の</p>	<p>正月元日 前大納言の君を先き給へり 御紋の御肩衣をまけ給へり三月十八日八浦 玉中巻鈴屋翁畧年譜詞通路其餘まき け給へり又熊野浦を白き珊瑚珠の出 るを伴言ふとて其文をきて國正月け 給へり七月内遠大人入家</p>	<p>二月十日格祿殊まき給へり老の後まて 出精一まき給へり西濱の御前あり 殊小賜物あり三月二日命たりて内遠大人を 嗣子とて藤子と娶合せ給へり六月より内 遠大人風土記新撰の頁小加とて給へり</p>
<p>四月西濱の御亭の名を翔燕亭とつけて奉 り給へり其餘御笛筒の銘記もま撰進し 給へり又歌まき給へり多かり 十二月廿二日二女熊子身まき給へり</p>	<p>古學要</p>	<p>をがらう一假字の辨</p>
<p>八十浦玉上卷刻成 同下卷脱稿 藤垣内集遺稿</p>	<p>隨筆稿 年々かまき合 まき給へり</p>	<p>七十五</p>
<p>七十八</p>	<p>七十六</p>	<p>七十七</p>

四	
<p>正月十九日御能を見給ふ云々 前大納言の君の正三位 かきこ給へ御よるにひたり或人の此のころ死する 翁文を記して奉り給ふ云々 賜物あり六月朔日 紀國忠孝傳の序文を記給ふ此のころ死する てうちや一給へと猶快きをもちハ御殿も出給ひ 何れの事ともある給へり年ご日記と云物と云 給へり八月二日まへに給へりもの一給へり作文ハ阿波 藩士賀島長総の直靈考の序稿を記す 給へりともあがりり此後まへに給へり 出給へり毎日重なり行給へり中々學道の事歌の 事と云いおき給ひ云々此は給へり事と云ふ まへ九月十一日の曉かきつひまうせ給へり後の名を國 足八十言靈大人と稱し普通の汰蹄と和心院意 富必樂居士とまをを奥墓ハ若山湊吹上寺あり鈴屋翁とむとく笏の を靈牌として影像とをて大人の家のハ祭り給へり此肖像ハ今年の三月丹 波人長谷川素庵と云る画工來居てうたてとてよく似たり上り 給へり母ハ 真直やちやと心ふまひてその神のまことの道と給へり 首のまへに給へり云々引直一給へり此の事ハ内遠大人の記給へり終焉の</p>	<p>八十浦玉上卷刻成 同下卷脱稿 藤垣内集遺稿</p>
<p>七十八</p>	<p>七十七</p>

○藤垣内翁畧年譜

○九